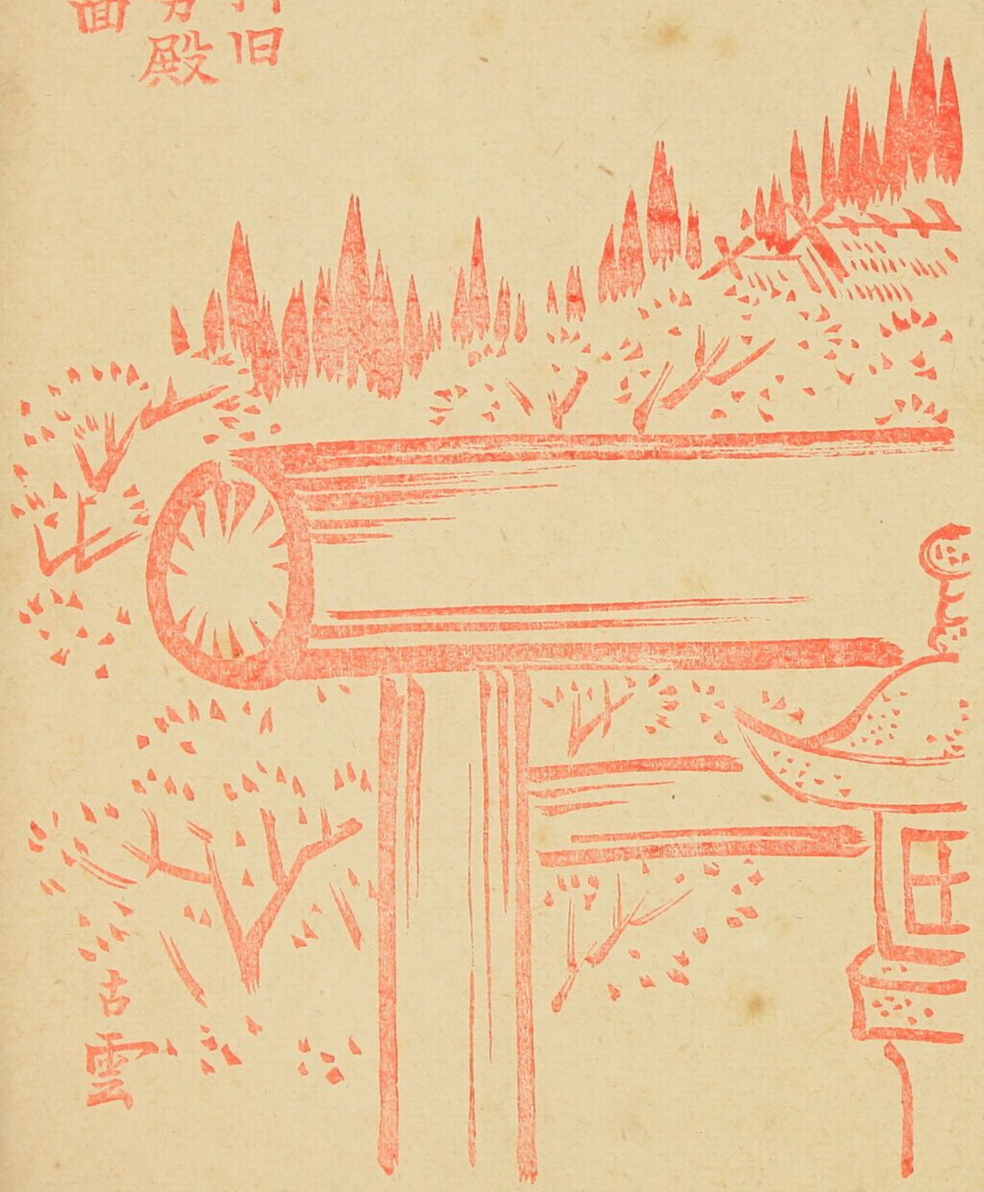
遷宮唱歌

足利旧伊勢殿之畠



古雪

榎南居士作歌

遷宮唱歌

忠男唱歌乃樂譜畧同

一　来れや来れ諸人よ
　　俱に待ちたる東町
　　天照します大神乃
　　遷宮式は今日ぞかし」

二　そも遷宮の今日かれは
　　皇大神を此土地ゐ
　　齋祭りし由緒を
　　いさゝか陳ん諸人よ」

三　初め祭りし年月は
今定かにはわからねど
幕府時代は伊勢殿と
崇めて知らぬ人もなし」

四　仰ぐよ餘る大華表
雙柱の圍り六尺餘
前よ立ちたる石燈籠
高さは壹丈五六尺」

五　華表潜れば本社まで
石敷わたし砥乃如し
本社の左右の神々は
伊勢に倣ひし末社也」

六　また神苑は起つ岩も
伏したる石も珍らしく
植し草木は美しく
殊よ櫻乃多ければ」

七

花乃盛は白木綿を
うけぬ梢はなりけり

御池よ咲ける杜若
衣よ摺るべく匂ふなり」

八

花橘よほと〻ぎす
鳴く頃過ぎつ何時の間よ

時雨に染て紅葉は
錦乃幣や手向らん」

九

豐年しるく降雪の
積れる松乃千代經んも

變らぬ宮と仰ぎしを
明治維新の其はじめ」

十

宮は移され社地はまゑ
所の人乃ものとなり

唯伊勢殿ゟ其名乃み
殘りて年を重ねたり」

十一　清久と言る敬神家
これを歎きて其舊乃
氏子を勸め誘ひて
共に謀りて其社地を」

十二　購ひ返し御社を
營み建て大神を
再び此所に祭りしは
二十餘年のむかしなり」

十三　舊の氏子と爰に言ふ
其人〳〵は今もなほ
此町内に住居する
我等信徒乃内なりき」

十四　是より以來此土地は
織物買場停車場
其建築を始めとし
家藏日々に增加せり」

十五 斯く繁昌の地となるも
皆大神乃御惠みぞ
其御惠みを報えんと
更に神殿作りたり」

十六 其神殿乃構造は
いかにと問ば神風や
伊勢の御廟に大小の
違ひはあれぞ同じ法」

十七 高天の原より千木高く
底津岩根より宮柱
太敷建て萱乃屋根
華表玉垣猿頭門」

十八 異木は用ひず總檜
今日の生日乃足日以て
齋乃場を取設け
遷宮式を擧るなり

十九　神官信徒打集ひ
幣帛捧げ机には
海山の物畑のものの
御酒御饌多に奉り」

二十　天津祝詞を聞き上げ
神樂を奏し大神を
いきめまつれは大神も
御心安く聞すらん」

廿一　斯く祭れるは信徒等が
幸福のみ願ふ所爲ならぎ
御代を八千世と祝ふ爲め
國安かれと祈るため」

廿二　畏けれども今日此所に
齊ひ祭れる大神の
神代の昔皇孫ま
授けたまひし神寶」

廿三　又其時の御遺勅は
御世繼々に傳はりて
君は御德は彌高く
國の光い彌まさる」

廿四　今上陛下の御代となり
ますゝ高く顯はれて
ますゝ遠く輝けば
日本は名は眞實ぞと」

廿五　外國人も仰ぎ見て
禮讓厚き國と譽め
文明國と敬へば
數にもあらぬ我等まで」

廿六　名譽を得しは大神と
今上陛下の御威德の
餘る光りを蒙むれる
故ふとあれも諸人よ」

廿七　共に忠君愛國の
　　日本心を振り起し
　　君乃御爲とからんよは
　　身をも惜まぢ從いん」

廿八　皇國ぢ爲とならんにい
　　努妻子とも愛まじと
　　いざや勉めんもろともに
　　いざや勵まん諸人よ」

明治三十六年六月十八日印刷
明治三十六年六月　卅　日發行

非賣品

栃木縣下野國足利郡足利町大字足利千百十一番地
著作兼發行者　秋　間　爲　八
東京市日本橋區新葭町四番地
印　刷　者　荒　木　新　兵　衛
東京市日本橋區新葭町四番地
印　刷　所　開　運　堂